

Exkurs

組織神学の可能性 - < 宗教と科学 > 関係論の観点から

< 内容 >

1. はじめに
2. 組織神学と相関の方法
3. 「宗教と科学」関係論
4. 展望

1. はじめに

1. この講義の目的は問題提起であり、解答を提示することではない
現代において、組織神学は容易ではない。なぜか。
 - ・研究の専門化による総合の困難さ（聖書学と組織神学）
 - ・総合では規範性が問われるが、そこにも困難がある
現代の思想状況においてキリスト教の立場を鮮明に打ち出すことの問題
内的にもキリスト教の立場を明確化するのは容易ではない
「正統と異端」の枠組みの解体
（ = Corpus Christianum の解体）
2. 組織神学の争点としての方法論（弁証学）
方法論に比重が置かれるのが、近代以降の動向（ダルフェルス）
補助学（周辺関連の諸学科）の大切さ（シュライアーマッハー）
諸学との関係性の確保 神学の科学性・学問性
歴史学、心理学、解釈学と存在論などなど
神学的言い方をすれば、聖書学（正典論）と啓示論

大木神学（『組織神学序説』教文館）

「欧米の神学者が出発するところからわれわれは出発することはできない、だからそのスタートラインをもっと手前に下げねばならないのであります」（97）。すなわち、欧米の神学者、たとえばバルトならば、「啓示論」から出発できるのに対して、日本では、欧米の神学者の一步手前から、「バルトの『啓示』論よりも手前に『そこに聖書がある』という事実への驚きから出発」（99）しなければならないのである。これは、欧米と日本とにおける状況の差であるが、「バルトは、啓示の出来事から出発しました。しかし、啓示の内容は、聖書なしには規定することができない」（164）

3. では、神学は、組織化や体系化を断念し、個別の専門領域の雑多な集合体という道を選ぶのか。新しい組織神学の可能性はないのか。

4. 以下、「相関の方法」と「宗教と科学」関係論という二つの点に着目して、組織神学の可能性について考えてみたい。

2. 組織神学と相関の方法

5. 組織神学（弁証学、教義学、倫理学）と方法の問題

組織神学：三つの部門あるいは構成要素

- a. 弁証学：理論的基礎、神学の真理概念、宗教哲学的問い
- b. 教義学：キリスト教メッセージを構成する諸象徴の構造化・体系化
- c. 倫理学：実践的視野の確保、社会的関係性のネットワークにキリスト教的生を結びつけるという課題

6. 相関の方法(Method of Correlation)

方法というよりも神学的思惟の基本構造としての位置づけ（メタ・レベル）

「状況とメッセージ」構造

いわゆる問いと答えの相関は、この構造の一つの具体化

相関自体が歴史性をもつ

状況とメッセージは相互に相手を組み込むことによって重層性をなしている。メッセージを構成する聖書と伝統

可能なのは、永遠の神学ではなく、いま・この神学

7. 現代の状況に相関するものとして、組織神学を再構築する課題

組織神学の可能性とは、相関の具体化の問題となる。

森本あんり『アジア神学講義』の例：文脈化と伝統

「神学は常にメッセージと状況という二つの極からの張力を受けつつ営まれる」(9)「欧米のこれまでの神学は、実は自己の文脈的出自を自覚しないにすぎない」、「文脈化」は、「すでに自己自身のキリスト教理解において起こっている事実なのである」(7)。これは重要な指摘であり、ここから「『純粋なキリスト教』というものはどこにも存在しない」(7)、「啓示は常に文脈の中で生起する」(8)、「伝統」「こうした過去との連続性を何らかの接点において確保する努力なしには、それがキリスト教の一部であるという保証もなくなってしまう」(26)、「個人と共同体にアイデンティティの源泉を提供する。」(27)

8. 状況をいかに捉えるか

ティリッヒとパネンベルクの共通性：意味の問い

意味の問いという観点から、人間学という意味での基礎的存在論（現象学的）

しかし、これは、コミュニケーション論を必要とする

9. 現代の思想状況・歴史的状況における相関の具体化の可能性

様々な可能性がある

宗教的多元性、ジェンダー・フェミニズム、戦争・平和、民族などなど

しかし、神学にとって、こうした諸問題と比べても勝るとも劣らない重要性を有しているのが、「宗教と科学」の関係をめぐる問題群であろう（科学あるいは科学技術こそが、近現代人の状況を大きく規定しているものだから）。これは、近代とポスト近代に状

況におけるキリスト教の合理性や真理性を論じる際のポイントであるから。

3 . 「宗教と科学」関係論

10 . 「宗教と科学」関係論：その可能性と射程 cf.マクグラス

基礎論：形而上学の再構築

思想史：近代科学の成立・展開とキリスト教

実践論：倫理的諸問題

組織化：？

11 . 「宗教と科学」の関係論の課題

理論：自然神学、形而上学的問いの不可避性

・パネンベルク：偶然性の問題、全体性の問題（経験の有意味性の構造）

科学自体が含意しつつも、顕わには神学的問題として立てられるべき問い

・パネンベルクとモルトマン

近代精神の分裂状況の克服

実践：環境危機に対処するための宗教と科学の協力

二つの条件：科学技術とエートス

環境に優しい、他の生命体と共生するエートスの形成

科学技術の
方向付け

「宗教的」な問題領域に属する

マクフェイグ：感受性

モルトマン：エートス

Einstein[1939/40] : Albert Einstein, Science and Religion (I-1939; II-1940), in: Albert Einstein, *Out of my later years*, The Citadel press 1956 pp.21-30

「宗教と科学の諸領域はそれら自身において相互に明確に区別されとしても、それにもかかわらず、両者の間には、強い交互関係と依存性が存在している。目的を規定するのは宗教かもしれないが、宗教は、どの手段が自らの設定した目的に到達するのに寄与するかについて、もっとも広い意味において、科学から学ぶことができる。これに対して、科学は真理と理解への熱望を徹底的に吹き込まれている人々によってのみ創造されうるのである。しかしながら、感情のこの源泉は宗教の領域から由来する。これには、現実存在の世界に妥当する諸規則が合理的である、すなわち諸規則は理性にとって理解可能である、との信念も属している。わたしは、この深い信念を持たないような本物の科学者など考えることができない。この状況は次のような比喻を用いて表現できるであろう。宗教のない科学はまっすぐ歩くことができず、科学のない宗教は行き当たりばったりである。」
(ibid.,p.26)

4 . 展望

12 . 「宗教と科学」関係論から見た組織神学の形

学問性：世俗性の位置

教会と個人（たとえば科学者）との関係の問題

スピリチュアリズムと教会

科学と信仰との関係の提示

体系・形態：三位一体論、時間と空間のバランスの回復（時間偏重に対して）

終末論の描くヴィジョン（全体性を問う地平としての終末論）

形而上学的枠組みに対して、

倫理：共生、責任性、共感・配慮というものに基づくエートス

< 文献 >

- 1 . Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.1*, The University of Chicago Press 1951
- 2 . Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Basil Blackwell 1988
- 3 . Alister E. McGrath, *A Scientific Theology. Vol.1: Nature* T&T Clark 2001
Vol.2: Reality Eerdmans 2002
Vol.3:Theory T&T Clarck 2003
- 4 . Sallie McFague, *Models of God. Theological for an Ecological, Nuclear Age*, 1987
The Body of God. An Ecological Theology, 1993
Super, Natural Christians. How we should love nature, 1997
Life Abundant. Rethinking Theology and Economy for a Planet in Peril,
2001 Fortress Press
- 5 . Wolfhart Pannenberg, *Toward a Theology of Nature. Essays on Science and Faith*, (ed. by
Ted Peters) Westminster / John Knox Press 1993
Natur und Mensch --- und die Zukunft der Schöpfung (Beiträge zur
Systematischen Theologie Band 2), Vandenhoeck & Ruprecht 2000
- 6 . Jürgen Moltmann, *Wissenschaft und Weisheit. Zum Gespräch zwischen Naturwissenschaft
und Theologie*, Chr. Kaiser 2002
- 7 . 大木英夫 『組織神学序説 プロレゴメナとしての聖書論』 教文館 2003年
- 8 . 森本あんり 『アジア神学講義 グローバル化するコンテクストの神学』 創文社
2004 年
- 9 . 芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』 創文社 1995年
「環境問題とキリスト教思想」 『日本の神学』 第 36 号 1997 年
pp.101 ~ 108 日本基督教学会
「キリスト教と近代自然科学 - ニュートンとニュートン主義
を中心に - 」 『京都大学文学部研究紀要』 第 38 号 1999 年
pp.147-244 京都大学文学部
「ティリッヒ 生の次元論と科学の問題」 『ティリッヒ研究』
創刊号 2000 年 pp.1-16 現代キリスト教思想研究会
「ティリッヒとエコロジーの神学」 『ティリッヒ研究』 第 4 号
2002 年 pp.1-16 現代キリスト教思想研究会
「P . ティリッヒと科学論の問題」 『キリスト教文化研究所紀要』

第 20 号、2002 年 8 月、pp.1-31 東北学院大学キリスト教文化研究所
「ティリッヒとアインシュタイン - 人格神をめぐる - 」
『ティリッヒ研究』第 5 号 2002 年 9 月 pp.1-18
現代キリスト教思想研究会
「環境と共生 - キリスト教の視点から - 」 『比較思想研究』第 29 号
2003 年 3 月 pp.28-35 比較思想学会